

グリーンアスパラガスの密植栽培における適品種

【要約】グリーンアスパラガスの茎枯病対策として、株の短期更新は有効であり、慣行の2倍の密植栽培をすることで、植え付けの翌年から成園並の収量が得られる。また、品種はプロシードが有望である。

三重県農業技術センター・栽培部・野菜栽培担当 連絡先 05984-2-6359

部会名	野菜・花き	専門	栽培	対象	葉茎菜類	分類	指導
-----	-------	----	----	----	------	----	----

【背景・ねらい】

暖地におけるグリーンアスパラガスは、一般に10年程で株の更新を行い、更新後数年は茎枯病の発生は少ないが、その後は茎枯病が多発し、大きな問題となっている。また、慣行の栽植密度では、更新後成園化するまでに3~4年を要し、その間の収量が低いことが問題となる。そこで、栽植密度を慣行の2倍とし、早期に成園並の収量を得るための適品種について検討した。

【成果の内容・特徴】

- ①栽植密度を慣行の10a当り1650株から2倍の3300株にすることで、収穫初年度(植え付けの翌年)から成園並の収量を得ることができる(表1、図1)。
- ②品種としては、プロシードは初年度から収量が高く、5年間の平均収量も最も高くなる(表1、図1)。階級別の収量比(重量比)についても、プロシードは商品価値の高い2L、Lの割合が、初年度から高くなる(図2)。
- ③年次別収量については、いずれの品種とも3年目までは収量が増加するが、4年目以降は、主に茎枯病の発生によって収量が低下する傾向がみられる(表1、図1)。
- ④株の更新時期としては、5年目には慣行と同程度の収量(500~600kg/10a)に低下するため、4年目収穫後が望ましいと考えられる(表1、図1)。

【成果の活用面・留意点】

- ①茎枯病の発生の多い地域に適用できる。
- ②密植栽培では、株の更新後の初年度から収量が多く、茎枯病の発生も少ないが、病気の予防には当初から十分な防除が必要である。

【具体的データ】

表1 品種別収量の推移 (kg/10a)

品種	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	平均収量
ホルトム	329.5	651.0	798.0	763.9	587.0	625.9
試交1号	429.3	757.0	1286.0	1019.4	503.0	798.9
プロシード	554.9	947.0	1306.0	919.4	533.0	852.1
バイトル	409.3	742.0	1148.0	923.5	505.0	745.6

栽培概要

定植 562.5
 栽植密度 3,300株/10a
 ビニール被覆時期
 S62年度:S63.1/15
 S63年度:H 1.1/12
 H元年度:H 2.1/22
 H2年度:H 3.1/11
 H3年度:H 4.1/15
 収穫期間
 S62年度:41日間
 S63年度:48日間
 H元年度:57日間
 H2年度:71日間
 H3年度:77日間
 施肥 (kg/10a)
 N:21.6 P₂O₅:18.0 K₂O:19.2
 夏期雨よけ管理

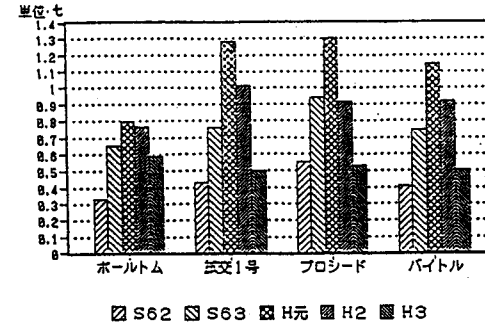


図1 品種別収量の推移 (t/10a)

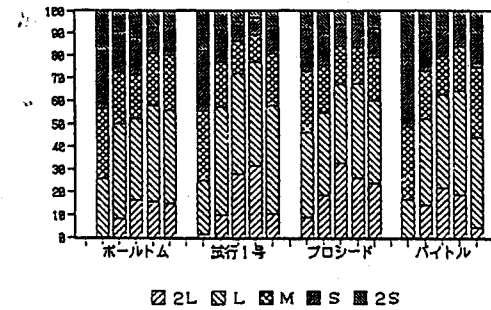


図2 階級別収量比 (%)

【その他】 (各品種共左より1~5年目)

研究課題名: グリーンアスパラガスのハウス2期どり、短期作型の開発
 予算区分: 県 単
 研究期間: 平成4年度 (S62~H3年)
 研究担当者: 藪田信次、田中一久
 発表論文等: